

5. 近代スポーツから

現代スポーツへの胎動

ーそのラフスケッチー

早川 武彦

I. 報告に当たって

*ここでは、新たなスポーツ状況がなぜ生み出されてくるのかを、フランスにおける近代スポーツの発展・変化の流れを見ながら考えていくことにする。

*その前に、そもそもスポーツとは何かを歴史的観点から概略的に把握しておく。

*議論としては、「現代スポーツ」を描き出す特徴点（特性）が、近代スポーツのそれとの比較で鮮明になるか、またその方法論はどうあるべきか、についてなされることを望みたい。

II. スポーツの変化・発展：近代スポーツの過去・現在・未来

1. スポーツとはなにか

スポーツとは、人間が人間になるために創り

出している身体諸活動の一定の様式をもった運動文化であり、時代、社会、風俗・習慣によってそのあり方は異なる。また運動文化は場、道具、人間関係・組織から成り、これらは常に時代や社会状況によってその特徴を変化させる。ここで強調すべき点は運動文化を獲得し、創り変えていく過程で、つまりより人間らしく成る過程で、共同の取り組みがなされるということである。たとえそれが個人的な種目のスポーツ（運動文化）であるとしても場、規則、技術、仲間、用具の確保などについて、仲間や他の組織と情報を交換し、共同の成果の上にたって楽しむのである。これは運動文化の行為者だけでなく、行為者を取り巻く者たち（協力者、組織者、そして取り巻き・観衆）をも含むものである。

2. スポーツ形成史概観（「スポーツにみる人間と自然」『一般教育総合科目Ⅰ人間と自然』1992より）

	～古代	～ 中世	～近代	～現代
a. 場：競技 組織 空間	村落を取り 巻く空間	都市の内部 的空間	生活地域内 的空間	ドーム・人工 的空間
自然環境	自然と 共生・対峙	自然 離脱	自然の 社会化	自然の 人工化・共生化
b. 道具	道具	道具の用具 化	用具の 技術化	技術の効率化・高度 化・多様化
c. 人：組織 競技者 取り巻き	村落集団、 生活的集団 取り巻き	地域・国内、 ギルドの仲間 はやし立て 賭	国内・国際、 クラブチーム 応援・観衆 賭（公営）	国際組織、多国籍 チーム、専門家集団 個別化・小集団化 観衆 賭（公・民＝企業化）

大まかな時代区分にみる特徴的なことは以下のようになる。

1) 前古代までおよび古代のスポーツ

前古代までのスポーツの特徴は、労働行為とは明確に区別されるスポーツの文化的形成期としてとらえることができる。それは、スポーツが労働を補完する祭、生活防衛・戦いなどの主役として登場してくることを意味する。労働以外の時間は、さまざまな文化的な行動を展開していたと思われる。それらは、狩猟活動を効率よく生産的におこなうための知的活動や労働訓練、仲間意識を強固にする遊びや祭などにみられる。つまりそれはヒトからひとそして人間になる創造的な行為の試行錯誤の営みであった。これらの活動は、村落の中で、集団的に行われ、同じ生活仲間同志のものである。自然の中で、そして時には自然と対峙して生活の一端を担う行為であるから、そこで用いられる道具も日常生活の範疇をでない。したがってこの時期のスポーツは日常的な空間と一体化していた。

古代になるとそれまでの行為は、それぞれひとまとまりの行動様式をもったものになる。やがてそれらの一部は、古代ギリシャやアテネで奴隷の格闘として市民のやらせ文化として現れる。この時代には、はじめ奴隷は明確に市民と区別されていたから、奴隷の格闘では、人権を無視し、人間同士あるいは人間と猛獣との対決といった、お互いを死に追いやる凄惨な行為がもてめられていた。さらに市民や王侯貴族の間でも凄惨な対決がおこなわれたが、暴力に対する感情は今日ほど敏感なものではなかった。力のある者、身体的に優れている者がその社会の指導者として君臨する時代で、ソクラテスやプラトンといった知恵者たちも古代オリンピック大会でいくつかの栄冠を獲得する時代へと変化する。プラトンがアカデメイアを創設し、そこで音楽と体育を中心とする教育思想を展開するようになると、人間社会の発展は、人間であることそして人間らしくなることへの希求からこうした残忍なスポーツを徐々に変えてき

た。

2) 中世の頃のスポーツ

ここでの特徴はスポーツが文化として形成される準備段階と見ることができる。スポーツ文化形成準備期といえる。古代のスポーツをより発展させたものになるが、しばらくの間、つまりルネッサンス期以前には取りたてて古代のそれを超える顕著な活動は現れない。教会の権威のもとで庶民の活動はかなり規制されていたからである。しかしルネッサンス期をむかえスポーツ活動も庶民のもとで多様に展開される。スポーツが民衆の活動として一定の様式を形成し始めたこの時期は、自然を意識し、自然からの離脱を開始し始める。人々は、スポーツを日常的な生活から切り離れた非日常の世界として、スポーツのための空間や時間を確保し始める。それは、自然から一定の空間を切りとり、生活の中に自分の時間をつくり、仲間と思う存分楽しむ活動である。しかしその活動は決して好ましいものばかりではなかった。王権や教権の下で市民権を奪われている状況では、社会的な規範やモラルなどそれほど意識されることがなく勢い活動が粗暴になるのはやむおえないことだった。それは社会的な成熟の度合いを反映していたのである。本来ならば非日常空間は、社会的な成熟の度合いを乗り越えてより人間的な世界を描くものだが、この時期はまだそこまで人々のスポーツに対する考えや見方が成熟していなかった。であるから非日常空間の形成といってもまだ初歩的な段階である。

3) 近代以降のスポーツ

人々の目が自己実現に向かって旧体制を打破し新しい市民社会をめざし始めると、さまざまな分野で思い思いの創造的な活動が展開してくる。スポーツ分野においてもこの傾向がみられる。それまでのような余りルールがはっきりせず、刹那的な行動に見切りをつけ、人間性を重視した活動が求められるようになる。そして近代市民革命や産業革命が進行する中でスポーツも新たな装いをこらし、近代スポーツが確立する時期を迎える。

近代スポーツは、統一ルール、統一組織を持つことによって地域性を打破し国内・外へと試合の輪を広げてくる。この統一ルール、統一組織の形成こそが近代スポーツの特徴をなす。ルールの中には競技方法は勿論のこと試合場や試合時間も決められてくる。つまり生活空間・時間から全く切り離れたスポーツ空間をルールのもとに創り出した。それだけに留まらず、ボールやシューズそしてウェアといった試合や競技に必要な道具もその試合や競技用に作り替えるようになり、操作し易いように技術化が進む。こうして行為、ルール、道具などが日常生活のそれとは区別され、非日常空間を作り上げる。

この非日常空間の特徴は、近代市民社会のルール（平等、民主主義、自治・自立など）を基礎に、日常的で社会的な不平等や不公平を徐々に取り除きながらより人間的な活動が求められる空間へと変化してきている。かつてのような粗暴で人間性を省みないような行為は否定され、暴力行為は排除され、際限のない何日にも及ぶ試合をやめ、仲間を大切に作る精神が尊重されるようになる。ヒューマンイズムと自己解放を求める活動にスポーツが関わることになった。

しかしだからといって全てが理想的な形でスポーツに現れてくるということにはならない。そこには限界がある。その基本となる市民社会原理が、自由や民主主義という側面以上に競争を軸とした経済効率性に依拠して展開されるから、スポーツ空間においても高度な技術性と効率性を要求する場となっていく。教育的にはスポーツマン精神とかフェアプレイといった倫理・道徳的な価値を説きながらも競争という勝負の前ではこれらが後退してしまう。

4) 現代のスポーツ

近代スポーツの誕生は、日常生活に独自の生活領域を切り開き、そこにスポーツ特有の文化スタイルを確立したことで、人間社会に大きな貢献をすることになった。そして社会的な制約を受けながらもスポーツは、人々の欠かすことのできない重要な文化として今日ますますその存在がクロー

ズアップされてきている。ユネスコは、1978年に「体育・スポーツ国際憲章」を採択し、「スポーツは万人の権利」であることを全世界に向けてアピールした。時々の社会的支配層は、これを私的な所有物とするためにさまざまな規定、「アマチュア規定」などを設け、明示的に労働者を排除してきたが、民衆のスポーツへの願いは理不尽なこれらの規定を排除させ、スポーツの門戸を開放することになる。オリンピック運動はその一翼を担うことになるが、しかしその崇高な目的や理念も、IOC委員らの時代迎合・理念喪失のために、時々の社会的、政治的、経済的な力に屈服させられ、民衆の願いは望む方向に進みえないでいる。それどころかこの政治的経済的な影響が頻繁に及ぼされるようになると、非日常空間は日常空間へ逆戻りすることになりかねない。現代のスポーツ状況は、スポーツ産業の支配下でこうした非日常空間の質的転換が起こりつつある。近代スポーツは日常生活や労働とは切り離された世界を形成したのだが、その世界に内在していた競争性や技術性や効率性に依拠した専門家が現れるに至り、これがプロとして社会的に認知されるに及び立派な労働として非日常の世界の一角を破ることになった。

統一ルール、統一組織のもとで近代スポーツは競争性、技術性、効率性を追求してきたが、それは巨大な力を持った国際オリンピック委員会（IOC）と国際競技連盟（IF）の体制の支配下で行われてきたのである。プロスポーツはこの支配体制を批判し、これらから抜け出たというのではなかった。IOCやIFがそれを認めてこなかっただけのことである。であるから最近ではIOCやIFもプロを認め大会に参加させるようになってきた。これはIOC体制の大きな変革を意味する。しかし残念なことにこうした変革も新しいスポーツ活動の胎動を視野にいれてはいないのである。プロを取り込んでIOC体制を維持しようとしているに過ぎない。こうして近代スポーツは今日プロ的な世界が大きく広がった見るスポーツ、見せるスポーツに一層傾斜してきている。最近のオリ

ンピック大会のイベント性はこれを如実に現している。しかもあらゆる技術を駆使して試合場や競技場を人工的に設定し、いつでもどこでも競技が行えるように条件整備が行われている。室内プールはすでにおなじみで、室内スキー場もすでに知られている。野球ドームもそうである。ところがウインドサーフィンとかフリークライミングなどはどうか。これらもすでに欧米では行われている。自然を切りとってしかもそれを部屋の中に閉じ込めてしまうというのである。

ところが一方で、こうした動きとは対照的に自らの生活に密着させたスポーツ活動が盛んになってきている。いわゆるニュースポーツの台頭もその一つ。ルールにせよ組織にせよ既成のものよりはかなり緩やかでそれほど苦しい練習をせず、気の向くままに活動を楽しむという、ざっくばらんのスポーツとして結構関心を集めている。これは決してわが国だけの現象ではない。むしろ欧米諸国からの輸入現象とさえいえる。海、山、空と自然を意識し、自然にとけ込むような思いがそこには満ちあふれている。力や技を重視してきたこれまでの近代スポーツとはこれらの点で様相を異にしている。人間の限界への挑戦という近代スポーツの競争性や効率性を重んじてきたスポーツから抜け出し自然からの情報をキャッチしそれをうまくコントロールするといった活動によって自己を表現しようとするのが新たなスポーツ活動の特徴である。つまり他人と競うのではなく自然といかに調和していくか、それによって日常的には得られない自由な空間をいかに拡大していくかにスポーツの醍醐味を見いだしている。その意味では新たな生活スタイルの重要なジャンルとして自然との共存の模索が始まっていると見ることができる。

このようにＩＯＣ体制下のスポーツであれ、新たに起こってきた自由なスポーツであれ、近代スポーツが誕生当初に持っていた非日常性はここに来てやや日常的な装いを新たにしてきた感がある。前者はプロスポーツの隆盛やスポーツ産業の増大によってスポーツそれ自体が仕事あるいは労働として成立してきたし、後者は、一つの生活スタイ

ルとして日常世界に自然と位置づいてきている。現代のスポーツはまさにファジーな日常空間なのである。

3. 近代スポーツの組織的特徴：クラブ組織の変化

近代スポーツの組織的な特徴はクラブを核として徐々に組織的な拡大が始まるところにある。以下では、そのクラブの性格の変化を見ながら、今日新たなスポーツ活動が起こってくる背景や根拠を考えることにする。

1) クラブの原型としてのコーヒーハウス

さまざまなクラブの原型はコーヒーハウスからだといわれる。（ミッチェル／リーズ、松村訳『ロンドン庶民生活史』）。コーヒーハウスは1600年代にロンドンに現れるが、その特徴は【出入り自由】で雑多な情報の拠点となっていた。それぞれの店に不特定多数の人々が集まり、日常的な会話を交わし、新しい情報を得られる場となっていた。まったく個別的な集まりであり、町のたまり場であった。

2) コーヒーハウスのテーマ化

やがてそれらのコーヒーハウスはそれぞれ共通の話題、関心、趣味を持った者の集まる店に分かれていく。つまり共通の話題（テーマ）を持った人々のたまり場になってくる。医者と相談する店、会話を楽しむ店、ラテン語を習う店というように専門的情報の拠点になってくる。この段階はまだ出入り自由な【開放的集団】である。

3) スポーツクラブの誕生

テーマ化した店は、そこで活動と話題を共有することになる。クリケットやフットボールなどスポーツの話題をもった店も現れてくる。そしてそれは同じメンバーの集まりの場となり、固定した人々の集まりと化し、会員制のクラブが導入されることになる。こうして今日のような会員制のクラブが誕生する。

4) クラブ組織の結成

スポーツクラブは、クラブ内の試合やゲームを楽しむ一方で他のクラブとの交流を進めていく。このクラブ間の交流が頻繁に行われるようになる

とクラブの活動が一定の組織化を必要とするにいたる。そこに会員制組織が結成をみることになる。他のクラブを意識することで自らの組織のアイデンティティーを誇示し内部の結束を強固にしていく。これは【閉鎖的共同体組織】の特徴をもつにいたる。

5) 連盟傘下のクラブ組織

閉鎖的な共同体意識はクラブ内の結束による対外的活動の重視・拡大の機運を盛り上げていく。そして自己のアイデンティティーを主張する場や機会として対外的な活動を可能とする他クラブとの一定の関係を結んでいく。こうしてクラブ内個人・会員とクラブ・組織の関係が、今度は、クラブの連合体組織・連盟と各クラブとの関係として作られ全体としては連盟傘下のクラブ組織ができあがる。組織が拡大し、活動が広がれば活動の効率化が必要となり、活動が専門化する一方で、それを統括する規律やルールがそれだけ必要となり、個人の自由度は制限されていく。つまり【活動の効率化、専門化、結束化、画一化】が起こり【組織規律の重視】が必然化する。

6) クラブ組織の企業化・プロ化

連盟傘下のクラブ活動が盛んになればなるほど活動は専門化し先鋭化してくる。そうなれば多くの会員は、それについていかれず、また専門・先鋭化していく部分との関係が希薄になり、その結果は会員の減少を招く。そうなれば経営の悪化は免れず、クラブ経営は破綻に瀕する。そこで専門・先鋭化する部分をプロ化し、クラブの企業化へと向かうことになる。ここにクラブ組織の【再編・合理化】が起こってくる。そしてクラブ組織の変化が現れ新たな組織の模索がはじまる。

4. 既成クラブ組織からの分離化傾向の組織的特徴比較

近代スポーツ組織活動における上記のような組織化の流れから、新しく起こってきている活動やその組織的な特徴を既成のそれと比較してみると以下のような組織的特徴が見られる。おそらくこの両組織の間には中間的な移行過程に位置づく特

徴が示されるのであろうが、これについては今後検討していくことにする。

【既成組織】 【中間・移行組織】 【脱既成組織】

- | | |
|---------|-----------|
| ・効率化 | ・非効率化 |
| ・機能化 | ・非機能化 |
| ・閉鎖化 | ・開放化 |
| ・専門・プロ化 | ・趣味化 |
| ・結束化 | ・不安定化 |
| ・規律・厳格化 | ・流動化・自由化 |
| ・集団化 | ・個人化・小集団化 |
| ・階層化 | ・非階層化 |
| ・単一化 | ・多様化 |

III. フランスにおけるスポーツ活動・運動の傾向分析

近代スポーツの変化の特徴を組織的側面から見てきたが、ここではこれをフランスの事例で見てみたい。

1. スポーツ活動状況分析

(生活条件調査研究センター『スポーツ現象分析資料』: Credoc collection des rapports, Matériaux pour une analyse du phénomène sportif, 1987を参照、ここでは割愛)

- 1) スポーツ連盟登録者数: 1985年までは恒常的増加傾向にある。
- 2) スポーツ連盟への加盟登録者数の伸び率: 80年代からは下降傾向にある。
- 3) スポーツ連盟構成団体別推移: 80年代からオリンピック種目団体が増加、非オリンピック種目団体が大きく減少傾向にある。
- 4) スポーツ5類型構成比の推移: 80年代から健康型スポーツと道具型スポーツが増加。滑走型スポーツも上向き傾向にある。
- 5) 健康型スポーツ種目の構成比推移: 体操や陸上競技などが後退し、ウォーキング・ワンダリング、エアロビクスなどが急上昇。
- 6) 身体接触型スポーツ種目の構成比推移: ボクシング、フェンシングが後退し、空手・合気道などが増大してきている。
- 7) 団体競技型スポーツ種目の構成比推移: 全

体的には伸びているが個人種目と比べると伸び率は劣る。

8) 滑走型スポーツ種目の構成比推移：全体として増加傾向。スキーは80年代再浮上。

9) 道具型スポーツ種目の構成比推移：80年代から急上昇。ラケット型、特にテニスが著しく増大。

*上記分類で用いられているスポーツ5類型とは以下の項目である。

A. 健康型：個人的な活動。体操、陸上競技、山登りなど。

B. 身体接触型：格闘技。素手あるいは手具を用いる。レスリング、フェンシングなど。

C. 団体競技型：団体間の競争。観客も含む。フットボール、ラグビー、バレー、など。闘争心や協力精神を重視。

D. 滑走型：空中、水中も含む。自然の環境のもとで滑ることを特徴とする。水泳も含まれる。自然のエネルギーの一部（風、引力、揚力など）を動力に活用する。

E. 道具型：滑走型をのぞく道具を用いるスポーツ。ラケット型（テニスなど）。

*最近の傾向では、健康指向スポーツと道具型スポーツが伸びている。理由は、前者は山登りやワンダーホーゲル、オリエンテーリングなど自然を対象とした活動の【エコ・スポーツ】が、後者は私的な施設を活用するエアロビクスやストレッチ、テニスなど【商業ベース】に導かれている。またオリンピック種目にも人気が集まってきている。集団種目はやや人気を落とし、身体接触型のスポーツは余り人気がない。【個人主義的なもの】や【競争性をそれほど競わないもの】を求める傾向が一段と強くなってきている。

しかしいずれの分野でも【新しい種目】（空手、エアロビクス・ストレッチ）、やハンドボールなどこれまで余り【やられていなかった種目】が目立つ。

伝統的なスポーツでは、スキー、テニスなどに再人気が集まっているが、これは【用具の新たな開発】によって、ゲレンデ以外のところを滑走で

きたり、ショートスキーやラージラケットのように【学習に余り時間がかからなくて楽しめる】ようになっているものが多い。

2. スポーツ運動の取り組み

フランスにおけるスポーツ運動それ自体も富士山型から八ヶ岳型、単心円型から多心円型に変化してきている。また労働者スポーツ運動においても対抗スポーツから調和スポーツへ、そして競技スポーツとみんなのスポーツの調和的發展へと、より多くの国民がスポーツに親しめる広範な運動方向をとってきている。

1) フランスにおける【みんなのスポーツ】運動の取り組み

1992年になってフランスの多種目連盟：FSCF（フランススポーツ・文化連盟：17万）、FSGT（労働者スポーツ体操連盟：36万）、FNOMS（全国市町村スポーツオフィス連盟：700団体）、UFOLEP（世俗労働者体育フランス連合：46万）4団体合同による「みんなのスポーツ」運動が展開され始めた。（別紙：「みんなのスポーツ・・・とてつもない夢」、「みんなのスポーツ、今日と明日」、D.I.R.E、FSGT、No. 43、1992.6—ここでは割愛）。これら4団体は、今後協力関係を保持しながら国際的な観点をも視野にいたれた運動を、以下のような観点で展開していくことを確認している。

・社会変化、・スポーツ財政（高水準スポーツとみんなのスポーツとのバランス）、・みんなのスポーツ活性化のための新たな能力、・職業スポーツ及びプロとボランティアの新たな関係確立、・国際情勢の変化並びにヨーロッパにおける変化。

また競技スポーツとみんなのスポーツとの関係は両者を切り放して見る事が不可能になってきた。競技スポーツもみんなのスポーツの諸形態に統合されるものとしてみていく。両者の調和的發展と発展をめざすことを確認している。

2) 国際的【なみんなのスポーツ】運動の取り組み

C S I Tの【みんなのスポーツ】運動の取り組みは80年代後半から積極的に展開されてきている。

(上野卓郎報告：「現代の国際労働者スポーツ運動：国際スポーツ運動とCSIT」、『研究年報1992』一橋大学体育共同研究室。なお今回の資料：「CSIT加盟諸連盟及びみんなのスポーツ部局の省察への提言」、「みんなのスポーツ・・・とてつもない夢」、「みんなのスポーツ、今日と明日」、「A. スペルコIOC委員の講演」は、ここでは割愛)

CSITは【みんなのスポーツ】運動をIOCとの共同で進めていく方向をとってきている。このことの是非は、CSITそのもののアイデンティティーや役割からみてどうかという疑問がなされている。(前回の上野報告)。その意味では、CSITとはなにかを問うのと同時に、【みんなのスポーツ】とはなにかをも問わなければならない。その点で、J. メーラーとR. ムスタールの「CSIT加盟諸連盟及びみんなのスポーツ部局の省察への提言」は、【みんなのスポーツ】の概念をはっきりさせることを提言しているだけに検討に値しよう。

IOCも【みんなのスポーツ】への関心を高め

てきている。(A. スペルコIOC委員の講演内容)。IOCが今日この問題に目を向けてきているのはなぜか、この問題を今後検討する必要がある。商業主義に走るIOCが、なぜ今P. クーベルタンの思想に立ち返ろうとするのか、CSITは、P. クーベルタンの“全ての人に全てのスポーツを”を媒介として、つまり彼のオリンピック運動をもとにIOCと【みんなのスポーツ】運動を展開していこうとしているかのようにみえる。この点についても今後検討が必要となろう。

以上近代スポーツにおける組織・運動的な側面から新たな形態や運動の展開を見てきたが、これまでにない状況をそこにみる事ができる。もはやIOCやIFを頂点とする世界の単一独占的スポーツ体制は変化を迫られていることが実感できる。しかしこれが今後どのような組織と運動に変化発展していくかその方向はまだ定かではない。各国民のスポーツ要求を充足するスポーツやスポーツ運動がニューススポーツやニューススポーツ運動への取り組みの中で多様に展開されることによって現代スポーツの顔が見えてくるに違いない。